あるファシリテーターが子供クラスの母親たちをスタディサークルに誘い、その参加者が自らのスタディサークルを持つようになるまでの経験です。

スタディサークルを持つまで	それまでの行動
もともと英語クラスに来ている子供たちに子供クラスをしたいと思い、お母さんたちに自分がしたいと思っている子供クラスのイメージを伝えるようなポスターを見せて誘った。	渉外局が作った・・・バハイワールドへようこそ・・・というポスターがあったので、それを見てもらいながら話した。「それは宗教みたいなものですか？」「そうです。子供クラスは宗教を教え込むものではなく、キリスト教の幼稚園や学校があるように、精神的教育をする場です」という話をして了承してもらった。その後クラスを見学してもらったり、毎月の学習のテーマなどを紹介した。
子供クラスを見学したり、理解してくれたお母さんたちをスタディサークルに誘いたいと思っている時、他の共同体メンバーに正しい教育についての話をしてもらいスタディサークル結成。	「嘘をつかない」という話：子供に対して「嘘をついてはいけません」と叱っている最中に電話がかかってきて「今取り込んでいるから居ないって言って」というのは、都合によっては嘘をついていいという教育をしていることになる。言葉と行動が異なるような教育はしてはいけない。正しい教育をしたいなら、ここにあるということでインスティチュートをすることになった。
スタディサークルの際、各 Book の章にある目的と実践について確認していった。その流れで Book7 に進む際、この本についてお母さんたちに確認した。	「この章の目的は〇〇です。実践は〇〇です。この章が終わるときに自分はどうなっていたいですか？」終わった時にも「どうでしたか？」と尋ねる。Book7 に進む際にも「Book7 を終了するとファシリテーターとしてスタディサークルが持てるのですが皆様はいかがですか？」と話したところ、お母さんたちが自分のスタディサークルを持つということを表明。
Book7 終了した4人に自分のスタディサークルを持つ為に、どうしたいですか？と尋ねた。	個人でスタディサークルを作るのは負担が大きいので、皆で参加者を集めるキャンペーンをやりたいと言われた。精神的なことに興味のありそうな方を誘って、そこでスタディサークルの話をしたらどうかという意見。
キャンペーン準備の為に3～4回集まり、期日や場所、キャンペーンの内容について煮詰めていった。	誰に来て欲しいのか、誰に向かってのキャンペーンか考えた。自分が知っている人で「この人に学んで欲しい」と思う人をあげることで4人のやる気が増した。開催場所は個人の家だと勧誘されるかもしれないという不安を抱いたり、小さな子供がいて迷惑になるかもしれないのでコミュニティセンターを選んだ。誘った目的がはっきりしていることが大切。ルヒそのもの、精神的なものに興味があるかどうかに焦点をあてるべきと話し合った。
キャンペーン当日、内容が目でも確認できた方がよいのでレジュメを作ることにした。	Book3 の中で1番心に残った引用文や4人が思うことを持ち寄り、文面を考え、いくつかの引用文を加えたものを作った。引用文は人目や気持ちを引く結果となった。
次の人を育てるためにしたこと。	すべてを自分でやってしまわない。それぞれが出来ることをすることで和合と奉仕の精神を引き出し、喜びを感じてもらうことができるので、例えば「飲み物はどうしましょうか？」「会場はどこにしましょうか？」などと尋ね、みんなが自分から手を挙げるチャンスを増やした。